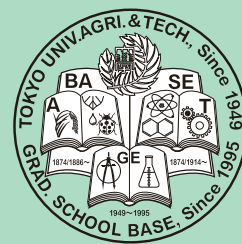


TUAT BASE

Graduate School of Bio-Applications and Systems Engineering

生物機能システム科学専攻
履修案内 2023



履修案内

目 次

1. 生物システム応用科学府概説	1
1.1 生物システム応用科学府で学ぶ意義	1
1.2 生物機能システム科学専攻の理念・目標	2
1.3 ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー	3
2. 履修方法の概説	4
2.1 履修要領	4
2.2 修了要件	6
2.3 教育課程表	7
博士前期課程教育課程表	7
博士後期課程教育課程表	8
2.4 履修方法（履修登録）	9
（参考）博士前期課程アドバンスⅢ～Ⅷの単位認定について	10
3. 教育職員免許状の取得について	11
付 録	
A. 教員室一覧	A1
B. 様 式	
他学府等履修届	A2
C. キャンパス配置図	
(C-1) BASE 本館配置図	A3
(C-2) 小金井キャンパス配置図	A6
(C-3) 府中キャンパス配置図	A10

1. 生物システム応用科学府概説

1. 1 生物システム応用科学府で学ぶ意義

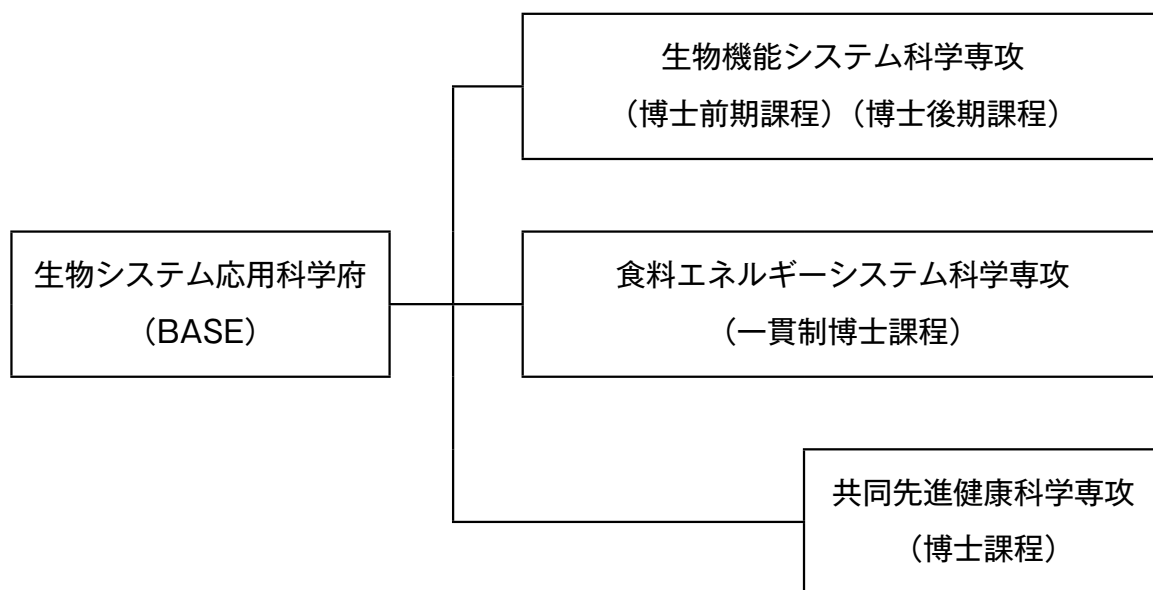
自然が何十億年かけて造り上げてきた生物、それは、物質の機能や相互作用、形態や運動、情報処理、物質やエネルギーの生産など、どのレベルで見ても非常に緻密なシステムを造り上げています。我々人類の科学技術が高度化し、その生み出そうとするシステムが精緻化していくにしたがい、生物システム応用科学府のコンセプト、「生物に学び、新しいシステムを創造する」は、ますますその重みを増してきます。

生物に直結する、農業、バイオテクノロジー、メディカル、食品などの分野では、もちろん、生物機能のより高度な解明とその新しい応用が進められています。しかし、それに留まることなく、新素材や高機能素材を目指す物質科学分野でも、広義のロボティクスという言葉で代表されるように、メカトロニクス、認識、知能などを扱う機械工学、電子情報工学など多くの分野で、生体に学び、それを超えることを目指して研究が進められています。

そして我々の科学技術が次世代に向かって残すべきもの、それは人類が永続的に生存するための、環境調和型の循環的な生産システムでしょう。ここでは、生態学やプロセス工学、エネルギー科学などの研究に基づいた、人類と生物がともにその構成要素となる、大きく、かつ精緻なシステムの構築が求められます。

このようなコンセプトのもとに、生物システム応用科学府には、農学系、工学系、理学系のいろいろな教員が集結しています。この学府に入学した学生諸君も、多岐の専門分野にわたると思います。諸君は、まず自分の専門分野で、優れた研究業績を出すようにして下さい。自分の専門分野の確立が、学際性の第一歩です。それと同時に、いろいろな分野の研究に注意を向け、自分の分野が生物システム応用科学の中でどのような位置づけにあり、どのような貢献ができるのかを考えて下さい。学際的視野とは、単なる広い知識ではなく、それらと自分との関係から生まれます。また、自分に研究の社会的意義についても目を向けて下さい。産学連携により、在学中にも実用的な成果を出せるかも知れません。

上記の目的を達成するため、生物システム応用科学府には生物機能システム科学専攻、食料エネルギーシステム科学専攻、共同先進健康科学専攻を設置しています。



生物システム応用科学府の専攻体制

1. 2 生物機能システム科学専攻の理念・目標

旧生物システム応用科学専攻では、生物機能、システムに学んだ幅広い領域を網羅的に農工融合の理念に基づいて取り組んできた。設置後約20年が経過し、社会的ニーズに基づいて取り組むべき課題が、食料、エネルギー、環境をキーワードにした持続的な人類生存に関わる領域、及び生物機能を応用した素材・物質、機械、情報、分析、循環、製薬など安全・安心で持続的に発展可能な社会実現に関わる領域の二つに大別されることが明らかになってきた。そのため2015年度からは、生物システム応用科学専攻を、食料エネルギーシステム科学専攻と生物機能システム科学専攻の二専攻体制に改組し、二専攻の異なる教育システムを活かして連動、連携して機能強化を行い、多面的な高度理系人材の育成を図ることとした。

生物機能システム科学専攻では、上記のうち生物機能を応用した工業分野、医療健康分野などの持続発展可能な社会の実現にむけて長期的視野に立脚した領域・課題に焦点を絞り、教育研究を特化する。例として、循環再生利用可能で低環境負荷のバイオミメティックな化学物質生産システムの構築、高品位なバイオプロダクトの高効率生産、生物に学ぶ物質変換システムの開発、大気や土壌、河川・海洋などの総合的な環境化学計測、光や超音波を利用した生体計測システム、得られた大量データの脳の機能を利用した情報処理と伝達、生物を模倣したロボット、医療ロボット、等のこれからの安全・安心な社会を支えるシステムの開発に関連した分野等が対象となる。

上記のような複雑系を理解し、新しいシステムを創生するためには、連携を強化した一専攻体制で教育・研究にあたり、「生物機能システム科学」という学問領域を発展させる必要があり、同時にそれらの学問領域を基盤にして生物機能に着目したシステム科学に関する教育を行う。教員は理学系、工学系、農学系の分野から構成され、特定の分野の知識・技能だけでなく、関連する分野の基礎的な素養を養うとともに、学際的な分野への対応能力を含めた専門的知識を活用・応用する能力を養うために、研究室の枠を超えた大学院教育を行う。すなわち、これまでの専門知識の講義以外のほとんどが研究室で行われる、閉ざされたラボ大学院教育ではなく、専攻が中心となって組織的に行うラボ・ボーダレス大学院教育を推進し、社会から求められている高度な人材を養成できる教育プログラムを実施する。養成すべき人材像は以下の通りである。

- ・生物に学び、その機能を活かした物質、機械、情報、医療・健康、医薬、物質循環など様々な農工融合の新たなシステムを理解し、幅広い分野で活躍できる人材
- ・特定の分野の知識・技能だけでなく、関連する分野の素養を基礎として、学際的な分野への対応能力を含めた高度な専門的知識を有し、それらを持続可能で安全・安心な社会の発展のために、活用できる人材
- ・産業界で、国際的なニーズの潮流を理解し、実践的な問題解決能力を持ち活躍できる人材

学生には、農と工にまたがる実学分野における分野横断的知識と研究展開能力（前期課程）、専門的な状況分析に基づいた、研究課題・テーマ設定能力、研究展開能力、基盤となる技術開発能力（後期課程）、研究開発及び実業分野で国際的に活躍できるコミュニケーション能力、事業推進力を習得させることを目標とする。

融合教育を強化するため、「生物機能システム科学専攻博士前期課程」では、4ターム制として1、3学期第1タームには、専門の根底にある基礎的概念、考え方を身に付けることができる「専門基礎科目」を、1、3学期第2タームにはより専門性の高い「専門応用科目」をそれぞれ提供し、さまざまな分野で学部教育を受けてきた学生が幅広い分野の基礎的な素養を身に付けることができるようにする。

博士後期課程においても、前期課程と同様に4ターム制として、1、3学期第1タームには学際的先端研究の計画、遂行能力を養うための高度な「専門融合科目」を開講し、1、3学期第2タームには、各専門分野で先導的な研究の実施能力を養うため「専門応用科目」を開講する。

1. 3 ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー

本学のディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーは以下のURL に掲載されています。学修の参考にしてください。

【東京農工大学 Web サイト】

トップページ＞学生生活・就職進学＞学生生活＞三つのポリシー
http://www.tuat.ac.jp/campuslife_career/campuslife/policy/



2. 履修方法の概説

生物機能システム科学専攻

本専攻は融合教育を強化するため4ターム制を導入している。本学の1学期、3学期それぞれの授業開講期間をほぼ2等分し、前半を第1タームとし後半を第2タームとする。

2. 1 履修要領

I 博士前期課程

(1) 授業科目区分の概説

博士前期課程の教育課程は、学際交流科目、融合基礎科目、分野交流科目、起業科目、専門交流科目、専門基礎科目、専門応用科目、論文研究等の8区分からなっている。各科目区分の教育目的は次のとおりとする。

① 学際交流科目

本専攻の強み・特徴である農工融合の理念、研究の多様性を「問題解決型学習」(PBL)に組み入れることで、エネルギー・環境・食料など地球規模の課題に主体的・協同的に取り組むことができる理系人材の育成を目指しつつ、学生が主体的・能動的な姿勢で大学院での研究・勉学に取り組めるよう、意識づけや、思考と行動の習慣化を促すことを目的とする。PBLに必要な知識や技法、実験データの整理法及び発表方法を学ぶ「課題解決型演習Ⅰ」及びグループ学習を主体とした「課題解決型演習Ⅱ及びⅢ」の合計6単位を必修とする。

② 融合基礎科目

自らの研究を安全に推進するためだけでなく、将来の職場における安全・危機管理に関する組織活動にも中心的存在として対応できる素養を身につけさせるために、「基礎技術演習Ⅰ」(必修)で、専門分野、関連分野、異分野をも含む幅広い安全・危機管理に関する基礎知識を修得させる。具体的には生物、化学、機械、電気等の各実験における危険行為や問題が発生した場合の対処方法などについて学ぶ。また、関連分野及び異分野の最先端の研究に直結した実験技術を幅広く身につけさせるために、すべての研究室で少人数グループに分かれて、大学院学生(RA、TA)の指導補助のもとに「基礎技術演習Ⅱ」(必修)を実施する。ただし、装置の数やスペースが限られているため、基礎技術Ⅱの受講には担当教員と主指導教員両方の承認を必要とする。基礎技術演習は各1単位として、ともに必修とする。

③ 分野交流科目

「実践発表」では、副指導教員等を含む複数の教員から発表指導を受けた後に学会発表など、公共の場において実際に発表を行い、効果的な各種プレゼンテーション法などを身につける。同時に、論理性に基づいた的確な質疑応答の能力を養う。

④ 専門交流科目

主として1学期に開講するアドバンスⅠ、Ⅱでは、学外の学識研究者等が専門分野に関連するトピックスについて講義する。1講義は1学期火曜日または金曜日の3～5時限に集中形式で行うことを基本とし、スケジュールはあらかじめ掲示により周知する。受講者は開講されるすべての講義の中から選択して履修できる。3講義の履修・合格によりアドバンスⅠとして1単位が与えられ、6講義の履修・合格によりアドバンスⅠ及びⅡとして2単位が与えられる。アドバンスⅠは必修とし、Ⅱは選択とする。

また、アドバンスⅢ～Ⅷでは、学外でのインターンシップ活動や特定プログラム受講のうち、一定の実施期間および実施時間等を満たすものについて単位を認定するものであり、各1単位の選択とする。特定プログラム受講のうち、サイエンスコミュニケーター養成実践講座については、10ページに記載する。

⑤ 論文研究等

セミナー、実験及び演習を通して学生自らの研究をとりまとめ、発表を行い、最終的に専門分野

を深化させた研究論文作成を行うものである。セミナー4単位、特別実験2単位、特別研究4単位を論文研究等として履修する。これらは通年科目であり、すべて必修とする。

⑥ 専門基礎科目

専門分野を教授する科目で、大学院生がスペシャリストとして自立して研究を行える基盤を作り上げる目的で第1タームに開講する。専門の根底にある基礎的概念を講義する。基礎的概念の理解は、さまざまなバックグラウンドを有する大学院生に対して有意なものとなる。専門基礎科目は15科目（各1単位）からなり、2単位以上修得しなければならない。

⑦ 専門応用科目

専門基礎科目と同様に専門分野を教授する科目で、大学院生がスペシャリストとして自立して研究を行える基盤を作り上げる目的で第2タームに開講する。専門基礎科目の内容をベースとして、より専門性の高い内容について講義する。専門応用科目は15科目（各1単位）からなり、2単位以上修得しなければならない。

（その他）強化授業科目

異分野から本専攻に入学した学生の基礎学力強化を目的として、数学、物理学、化学、生物学などの基礎を学ぶことができる学部の授業科目を履修する。ただし、受講に際しては主指導教員と十分に相談すること。なお、修了必要単位としては認めない。

II 博士後期課程

（1）授業科目区分の概説

博士後期課程の教育課程は、分野交流科目、専門融合科目、専門応用科目、論文研究等の4区分からなっている。各科目区分の教育目的は次のとおりとする。

① 実践英語発表Ⅰ、Ⅱ

実践英語発表Ⅰでは、英語によるプレゼンテーションのノウハウを修得するため、実習形式の授業として開講する。

実践英語発表Ⅱでは、副指導教員等を含む複数の教員から発表指導を受けた後に公共の場において実際に英語で発表を行い、効果的なプレゼンテーション方法を身につける。実践英語発表は各1単位とする。

② 専門融合科目

専門分野を教授する科目で、大学院生がスペシャリストとして自立して研究を行い、高度に専門的な業務に従事するのに必要な高度の研究能力及び学識を養うことを目的で第1タームに開講する。専門融合科目では、生物機能システム科学に係る専門の根底にある概念・考え方について特に高度な内容について講義し、学際的先端研究の計画、遂行能力を養う。専門融合科目は16科目（各1単位）からなる。

③ 専門応用科目

専門融合科目と同様に専門分野を教授する科目で、大学院生がスペシャリストとして自立して研究を行い、高度に専門的な業務に従事するのに必要な高度の研究能力及び学識を養うことを目的で第2タームに開講する。専門融合科目の内容をベースとして、生物機能システム科学に係る専門性の高い内容について講義し、先導的な研究の計画、遂行能力を養う。専門応用科目は16科目（各1単位）からなる。

④ 論文研究等

セミナー及び計画研究を通して学生自ら、文献及び研究テーマの分析を行い発表・討議を重ね、最終的に専門分野を深化させた研究論文作成を行うものである。特別セミナー2単位、特別計画研究6単位を論文研究等として履修する。これらはすべて必修とする。

2. 2 修了要件

【修了に必要な最低修得単位数】

博士前期課程

科目区分		修了に必要な修得単位数
学際交流科目	課題解決型演習Ⅰ～Ⅲ	必修6単位
融合基礎科目	基礎技術演習	必修2単位
専門交流科目	アドバンストⅠ	必修1単位
専門基礎科目		選択必修2単位以上
専門応用科目		選択必修2単位以上
論文研究等		必修10単位
他の学府等（修士、博士前期課程または一貫制博士課程の1, 2年次）の専門分野科目		選択10単位以下
合計		30単位以上

博士後期課程

科目区分		修了に必要な修得単位数
分野交流科目		選択4単位以上
専門融合科目		
専門応用科目		
他の学府等（博士、博士後期課程または一貫制博士課程の3年次以降）の専門分野科目（選択10単位以下）		
論文研究等		必修8単位
合計		12単位以上

他の大学院及び本学の他の学府等の授業科目の修了要件算入について

① 他の大学院の授業科目

他の大学院の授業科目を履修し、単位を修得した場合は、前期課程及び後期課程を通して15単位を限度として、修了に必要な単位数の選択単位数に認定の上、これを算入することができる。

② 本学の他の学府等の授業科目

本学の他の学府等（生物システム応用科学府の他専攻を含む）の授業科目を履修し、単位を修得した場合は、前期課程及び後期課程を通して15単位を限度として、修了に必要な単位数の選択単位数に算入することができる。

③ ①及び②を合算して20単位を限度として、修了に必要な単位数の選択単位数に算入することができる。

なお、本学の学部の授業科目を履修することができるが、当該履修により修得した単位は修了要件に算入しない。また、共同先進健康科学専攻の早稲田大学開講科目は履修できない。

【成績評価基準】

成績はS・A・B・C・Dで評価を区別します。S・A・B・Cは合格です。不合格及び途中放棄はDとなり、成績表には表示されますが、成績証明書には表示されません。

S… 100～90点 到達基準を超えた成果を上げている。

A… 89～80点 到達基準を十分達成している。

B… 79～70点 到達基準を達成している。

C… 69～60点 到達基準をおおむね達成している。

D… 59～0点 到達基準に達していない。

2. 3 教育課程表

生物システム応用科学府 生物機能システム科学専攻 博士前期課程 教育課程表

科目区分	授業科目	単位数	履修期間	担当教員
学際交流科目	課題解決型演習Ⅰ	◎2	1①・3①	各教員
	課題解決型演習Ⅱ	◎2	1①・3①	各教員
	課題解決型演習Ⅲ	◎2	1①・3①	各教員
融合基礎科目	基礎技術演習Ⅰ	◎1	1①・②	各教員
	基礎技術演習Ⅱ	◎1	1③	各教員
分野交流科目	実践発表	1	1③・④	各教員
専門交流科目	アドバンストⅠ	◎1	1③	非常勤講師
	アドバンストⅡ	1	1③	非常勤講師
	アドバンストⅢ	1	1③	各教員
	アドバンストⅣ	1	1①・③	各教員
	アドバンストⅤ	1	1①・③	各教員
	アドバンストⅥ	1	1①・③	各教員
	アドバンストⅦ	1	1①・③	各教員
	アドバンストⅧ	1	1①・③	各教員
論文研究等	生物機能システム科学セミナー	◎4	1通	各教員
	生物機能システム科学特別実験	◎2	1通	各教員
	生物機能システム科学特別研究	◎4	1通	各教員
専門基礎科目	物質機能設計特論Ⅰ	1	1・2①	村上
	物質機能設計特論Ⅲ	1	1・2③	萩野
	物質機能応用特論Ⅰ	1	1・2③	岩見
	物質機能応用特論Ⅲ	1	1・2③	銭
	物質機能分析特論Ⅰ	1	1・2③	橋本
	物質機能分析特論Ⅲ	1	1・2①	赤井
	生体分子化学特論Ⅰ	1	1・2③	田畑
	生体モデル知覚システム特論Ⅰ	1	1・2①	古宮
	生体モデル知覚システム特論Ⅲ	1	1・2③	藤波
	環境機械システム特論Ⅰ	1	1・2①	池上
	環境機械システム特論Ⅲ	1	1・2③	石田
	生体・環境応用システム特論Ⅰ	1	1・2①	水内
	資源生物創製科学特論Ⅰ	1	1・2①	鈴木
	資源生物創製科学特論Ⅲ	1	1・2③	梶田
	生体医用計測機器特論Ⅰ	1	1・2①	榊田
	専門応用科目	物質機能設計特論Ⅱ	1	1・2②
物質機能設計特論Ⅳ		1	1・2④	萩野
物質機能応用特論Ⅱ		1	1・2④	岩見
物質機能応用特論Ⅳ		1	1・2④	銭
物質機能分析特論Ⅱ		1	1・2④	橋本
物質機能分析特論Ⅳ		1	1・2②	赤井
生体分子化学特論Ⅱ		1	1・2④	田畑
生体モデル知覚システム特論Ⅱ		1	1・2②	古宮
生体モデル知覚システム特論Ⅳ		1	1・2④	藤波
環境機械システム特論Ⅱ		1	1・2②	池上
環境機械システム特論Ⅳ		1	1・2④	石田
生体・環境応用システム特論Ⅱ		1	1・2②	水内
資源生物創製科学特論Ⅱ		1	1・2②	鈴木
資源生物創製科学特論Ⅳ		1	1・2④	梶田
生体医用計測機器特論Ⅱ	1	1・2②	榊田	

備考

- ◎印の授業科目は、必修とする。
- 専門交流科目アドバンストⅠは必修とし、Ⅱ～Ⅷは選択科目とする。
アドバンストⅣ～Ⅷは、インターンシップ、特定プログラムによる認定単位の充当科目とする。
- 専門基礎科目から2単位以上を修得すること。
- 専門応用科目から2単位以上を修得すること。
- 履修期間にある数字は学年、○に囲まれた数字はタームを表す。(例 1・2①→1年次と2年次の1学期第1ターム)
①1学期第1ターム、②1学期第2ターム、③3学期第1ターム、④3学期第2ターム

生物システム応用科学府 生物機能システム科学専攻 博士後期課程 教育課程表

科目区分	授業科目	単位数	履修期間	担当教員
分野交流科目	実践英語発表Ⅰ	1	1①・②	各教員
	実践英語発表Ⅱ	1	1③・④	各教員
論文研究等	生物機能システム科学特別セミナー	◎2	1通	各教員
	生物機能システム科学特別研究	◎6	1通	各教員
専門融合科目	物質機能材料開発特論Ⅰ	1	1・2・3①	萩野
	エネルギー材料システム特論Ⅰ	1	1・2・3③	村上
	機能物質設計特論Ⅰ	1	1・2・3③	岩見
	物質環境設計特論Ⅰ	1	1・2・3③	銭
	超分子機能解析特論Ⅰ	1	1・2・3①	赤井
	分子環境土壌学特論Ⅰ	1	1・2・3③	橋本
	生命機械システム特論Ⅰ	1	1・2・3①	石田
	エネルギーマネジメント特論Ⅰ	1	1・2・3③	池上
	生物システム応用ロボティクス特論Ⅰ	1	1・2・3③	水内
	バイオエレクトロニクス特論Ⅰ	1	1・2・3③	田畑
	視覚情報伝達特論Ⅰ	1	1・2・3①	藤波
	視覚信号処理特論Ⅰ	1	1・2・3③	古宮
	生物環境調節学特論Ⅰ	1	1・2・3①	
	資源生産制御特論Ⅰ	1	1・2・3③	梶田
専門応用科目	物質機能材料開発特論Ⅱ	1	1・2・3②	萩野
	エネルギー材料システム特論Ⅱ	1	1・2・3④	村上
	機能物質設計特論Ⅱ	1	1・2・3④	岩見
	物質環境設計特論Ⅱ	1	1・2・3④	銭
	超分子機能解析特論Ⅱ	1	1・2・3②	赤井
	分子環境土壌学特論Ⅱ	1	1・2・3④	橋本
	生命機械システム特論Ⅱ	1	1・2・3②	石田
	エネルギーマネジメント特論Ⅱ	1	1・2・3④	池上
	生物システム応用ロボティクス特論Ⅱ	1	1・2・3④	水内
	バイオエレクトロニクス特論Ⅱ	1	1・2・3④	田畑
	視覚情報伝達特論Ⅱ	1	1・2・3②	藤波
	視覚信号処理特論Ⅱ	1	1・2・3④	古宮
	生物環境調節学特論Ⅱ	1	1・2・3②	
	資源生産制御特論Ⅱ	1	1・2・3④	梶田

備考

- ◎印の授業科目は必修とする。
- 履修期間にある数字は学年、○に囲まれた数字はタームを表す。(例 1①・②→1年次の1学期第1ターム、第2ターム)
①1学期第1ターム、②1学期第2ターム、③3学期第1ターム、④3学期第2ターム

2. 4 履修方法（履修登録）

授業科目を履修し、単位を修得するには、学内の学務情報システム（SPICA）のWEBサイトを通じて、登録（入力）しなければならない。

履修登録は大変重要な手続きで、登録のない授業科目は授業を受けることも、試験を受けることもできないし、単位を修得することもできない。自分が履修すべき科目について、学生便覧、履修案内等で十分に検討し、計画を立て、確実に登録を行うこと。

（1）履修登録の期間

別途掲示する履修登録の期間内（WEB 掲示板に留意すること）

（本学府は4ターム制をとるが、履修登録に関しては、1学期第1ターム、第2タームを4月に3学期第1ターム、第2タームを10月に行うので、間違えないように）

（2）履修登録手続きについて

- ① 学生の履修登録は、学務情報システム（SPICA）のWEBサイトにより行うこと。
- ② 履修登録には、他の学府の授業科目及び学部の授業科目を含め、履修するすべての科目について登録すること（本学府以外は、4学期制である）。

【留意事項】

- ① 履修登録に際しては、学生便覧及び履修案内を熟読の上、指導教員から履修上の指導を受け、履修計画を立てること。
- ② 履修上の諸注意等については、WEB 掲示板により周知することが多いので、小金井地区学生支援室教務係からの掲示に留意すること。
- ③ 博士前期課程の授業科目アドバンストⅣ～Ⅷ（学外でのインターンシップ活動や特定プログラム受講のうち、一定の実施期間および実施時間等を満たすものについて単位を認定するもの）については、10 ページを参照すること。

(参考) 博士前期課程アドバンスⅢ～Ⅷの単位認定について

博士前期課程の授業科目アドバンスⅢ～Ⅷ（学外でのインターンシップ活動や特定プログラム受講のうち、一定の実施期間および実施時間等を満たすものについて単位を認定するもの）について、国際科学博物館が実施するサイエンスコミュニケーター養成実践講座、民間企業等におけるインターンシップの扱いは以下のとおりとする。

■民間企業等におけるインターンシップ

民間企業等におけるインターンシップを実施・修了し、単位認定を希望する学生は、「インターンシップ実施届」にて、予め指導教員の了解を得て、小金井地区学生支援室教務係まで申し出てください。実施内容、実施期間及び実施時間等を踏まえて、学務委員会で審議の上、承認されれば単位認定を行います。インターンシップ終了後は、必ず実施概要がわかる書類、修了証明書等の資料を提出してください。

インターンシップについては、成績評価は行われず、「認定」単位のみとなります。(S, A, B, Cは付与されませんが、修了に必要な単位に含めることができます。) その他の詳細は、小金井地区学生支援室教務係に問い合わせてください。

■国立科学博物館 サイエンスコミュニケーター養成実践講座

1. サイエンスコミュニケーター養成実践講座の概要

本学は、国立科学博物館と相互の交流と教育課程の充実を図ることを目的として、パートナーシップ契約を結んでいます。

国立科学博物館で実施するサイエンスコミュニケーター養成実践講座の受講を希望する学生については、下記のとおり単位認定を行っています。

2. 出願資格等

- (1) 出願資格 博士前期課程、修士課程に在学する学生
- (2) 受講料 31,430円 (1科目/令和4年度現在)
- (3) 開講科目

サイエンスコミュニケーション1、サイエンスコミュニケーション2 (令和5年度)

- (4) 出願時期・開講時期

例年の出願時期は5月下旬、開講時期はサイエンスコミュニケーション1が7～8月、サイエンスコミュニケーション2が10～12月となります。

詳細は、国立科学博物館 サイエンスコミュニケーター養成実践講座のHPから確認してください。

<http://www.kahaku.go.jp/learning/university/partnership/02.html>

- (5) 手続きの流れ

受講を希望する学生は、直接サイエンスコミュニケーター養成実践講座のHPから申し込んでください。受講が決定すると、国立科学博物館から本学に受講者リストが届くとともに、受講後には成績表が届きます。

3. 単位認定及び学業成績

国立科学博物館から送付された成績表に基づき、サイエンスコミュニケーション1、サイエンスコミュニケーション2を、アドバンスⅢ～Ⅷ(※)に振り替えて単位認定します(1科目2単位の振替)。また、成績については、国立科学博物館からの成績を基に、指導教員がS, A, B, Cの成績評価を行います。

(※) アドバンスⅢ～Ⅷは、各1単位の単位数となります。そのため、サイエンスコミュニケーション1を受講する学生は、アドバンスⅢ、Ⅳを、サイエンスコミュニケーション1とサイエンスコミュニケーション2を受講する学生は、アドバンスⅢ～Ⅵを履修登録する必要があります。(7ページの教育課程表参考)

3. 教育職員免許状の取得について

本学府に、教育職員免許法に基づいて、中学及び高等学校の教育職員免許状を取得するための課程が設置されている。(学則第67条)

この課程において定められた科目の単位を修得すれば、教育職員免許状を取得することができる。

3. 1 免許状の種類及び取得に必要な単位数

(生物機能システム科学専攻博士前期課程のみ)

免許状の種類	取得に必要な単位数 (教科に関する科目)
中学校専修免許状(理科) 高等学校専修免許状(理科)	理科に関する科目 24単位以上 (但し、特別講義科目及び企業科目を除く)

注) 本専修免許状の取得は、上記同一の免許教科の中学教諭1種免許状又は高等学校教諭1種免許状の取得資格を有している者に限られる。

3. 2 教科に関する科目

取得に必要な教科に関する科目は「学生便覧」の「教職課程について」の項を参照し、単位修得に留意すること。

3. 3 その他

(1) 教育職員免許状の取得を希望する者は、履修登録期間中に小金井地区学生支援室教務係に必ず申し出ること。

(2) 不明な点については、下記問合せ先に問い合わせること。

問合せ先

小金井地区学生支援室教務係 TEL: 042-388-7010

付 録

生物システム応用科学府 生物機能システム科学専攻 教員室一覧

教育研究分野名	教員名	教員室		E-mail
		室名	電話	
物質機能設計	教授 荻野賢司	323号室	388-7404	kogino
物質機能応用	教授 銭衛華	1-115号室	388-7410	whqian
	※ 准教授 稲澤晋	232号室	388-7105	inasawa
物質機能分析	准教授 橋本洋平	413号室	388-7276	yhashim
	※ 准教授 中田一弥	330号室	388-7767	nakata@go.tuat.ac.jp
生体医用フォトンクス	※ 准教授 西館泉	614号室	388-7065	inishi
生体モデル知覚システム	教授 藤波香織	7-3E号室	388-7499	fujinami
	准教授 古宮嘉那子	10-515号室	388-7406	kkomiya@go.tuat.ac.jp
環境機械システム	教授 石田寛	130号室	388-7420	h_ishida
	准教授 池上貴志	129号室	388-7435	iket
資源生物創製科学	教授 梶田真也	514号室	388-7391	kajita
	※ 准教授 鈴木丈詞	420号室	388-7278	tszk
物質エネルギー設計	※ 教授 富永洋一	4-121号室	388-7058	ytominag
エネルギーシステム解析	※ 教授 秋澤淳	123号室	388-7226	akisawa
生態系型環境システム	※ 教授 豊田剛己	414号室	388-7915	kokit
生物応答制御科学	※ 教授 梅澤泰史	513号室	388-7364	taishi
環境モニタリングシステム	准教授 赤井伸行	329号室	388-7344	akain
物質機能革新	准教授 村上尚	1-S315号室	388-7035	faifai
環境光システム	准教授 岩見健太郎	6-307号室	388-7658	k-iwami
ロボティクス	教授 木内郁夫	14-206号室	388-7457	mizuuchi
バイオエレクトロニクス	講師 田畑美幸	614号室	388-7417	tabata-bir@go.tuat.ac.jp

※食料エネルギーシステム科学専攻教員

生物機能システム科学専攻以外（その他授業科目）開講用 履修届

所 属	課 程

学 年	氏 名	学 籍 番 号

記入例

(食料エネルギーシステム
科学専攻授業科目 23)

時間割コード (6桁) 授業科目名・教員名					
1	0	0	2	1	2
生物物理化学 I ・農工太郎					

(工学部授業科目 02)

時間割コード (6桁) 授業科目名・教員名					

(工学府前期課程授業科目 06)

時間割コード (6桁) 授業科目名・教員名					

(農学府授業科目 05)

時間割コード (6桁) 授業科目名・教員名					

(産業技術専攻授業科目 31)

時間割コード (6桁) 授業科目名・教員名					

(農学部授業科目 01)

時間割コード (6桁) 授業科目名・教員名					

(工学府後期課程授業科目 08)

時間割コード (6桁) 授業科目名・教員名					

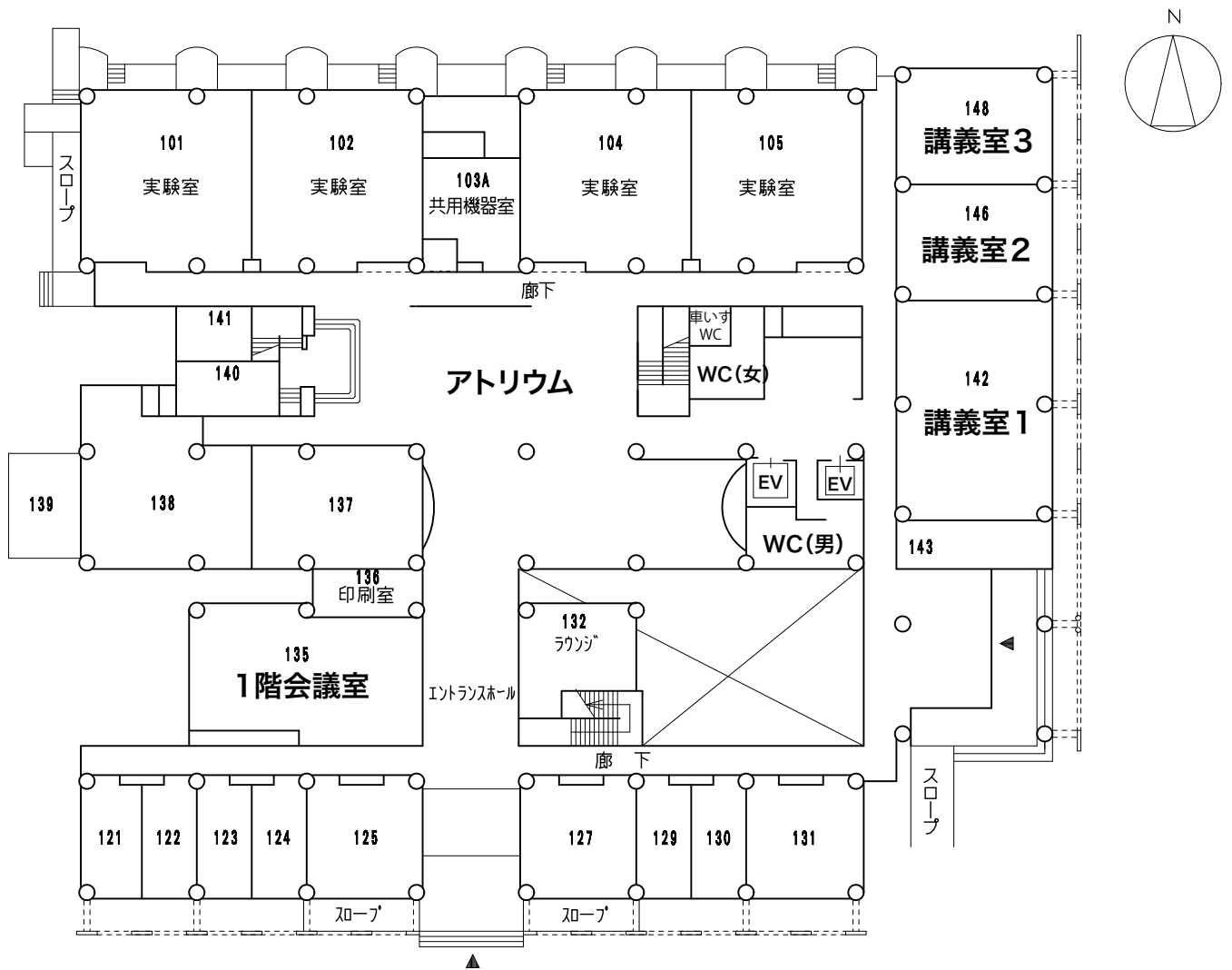
(その他)

時間割コード (6桁) 授業科目名・教員名					

※ 履修にあたっては、必ず授業担当教員に確認すること。

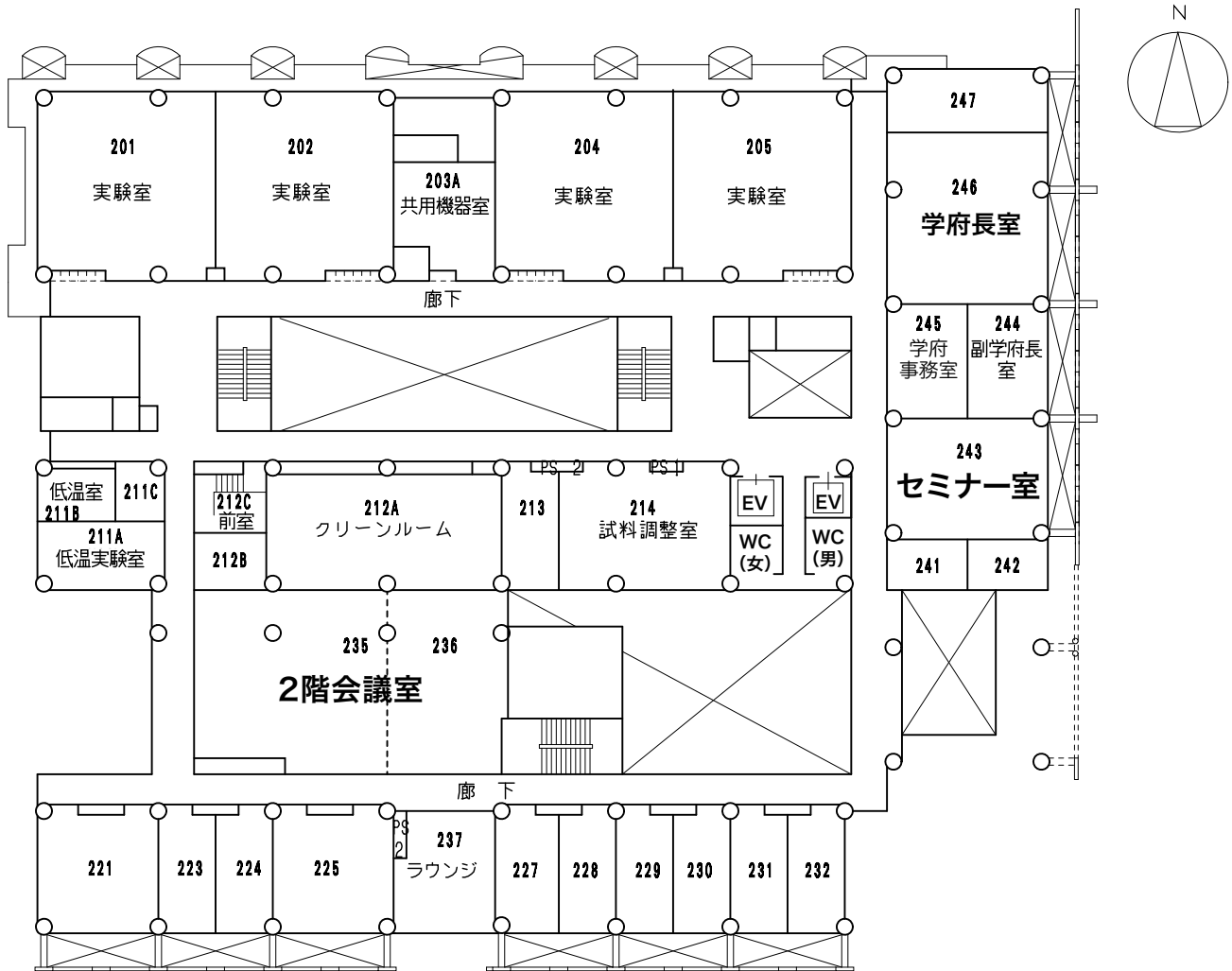
BASE 本館配置図

■ 1階



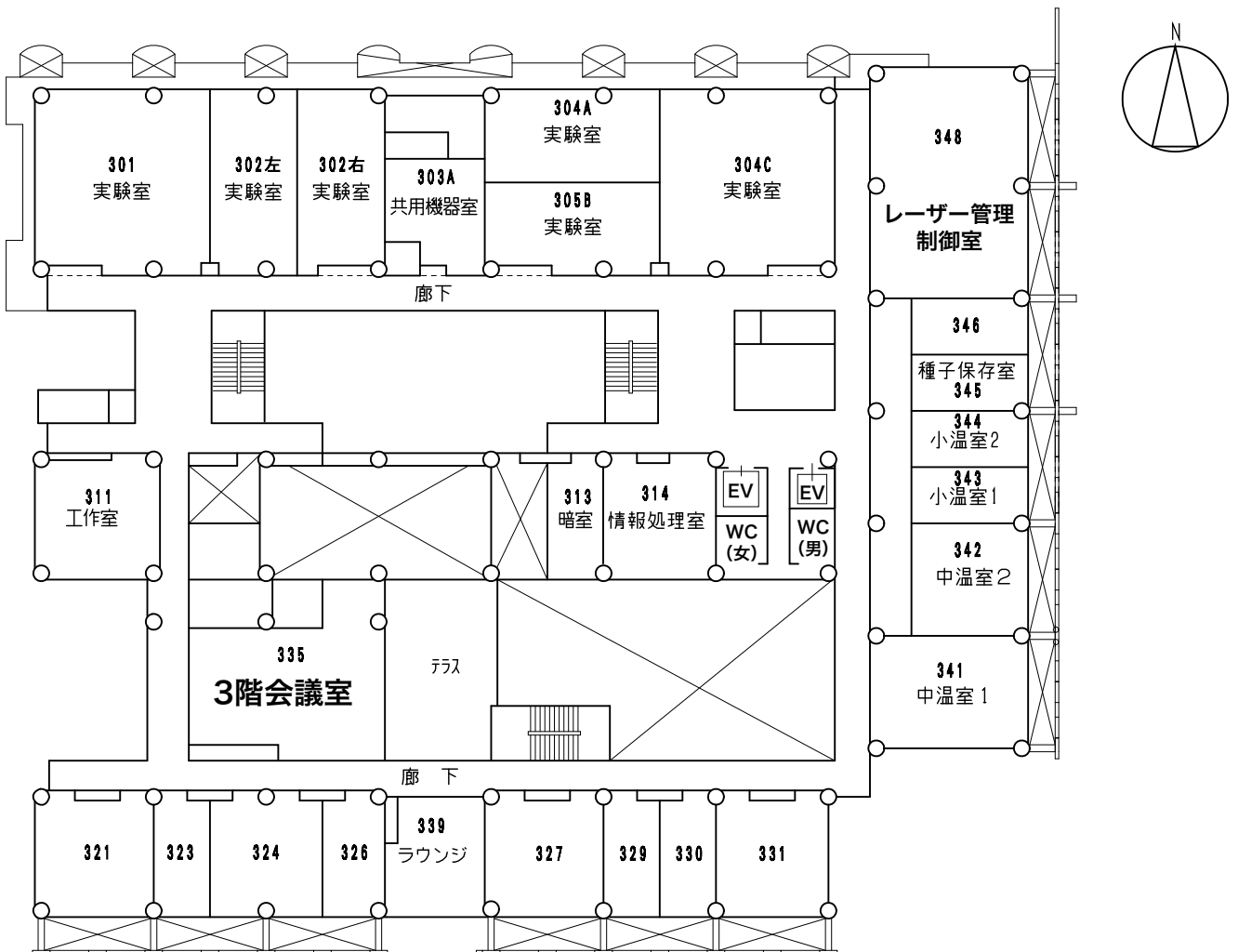
BASE 本館配置図

■ 2階



BASE 本館配置図

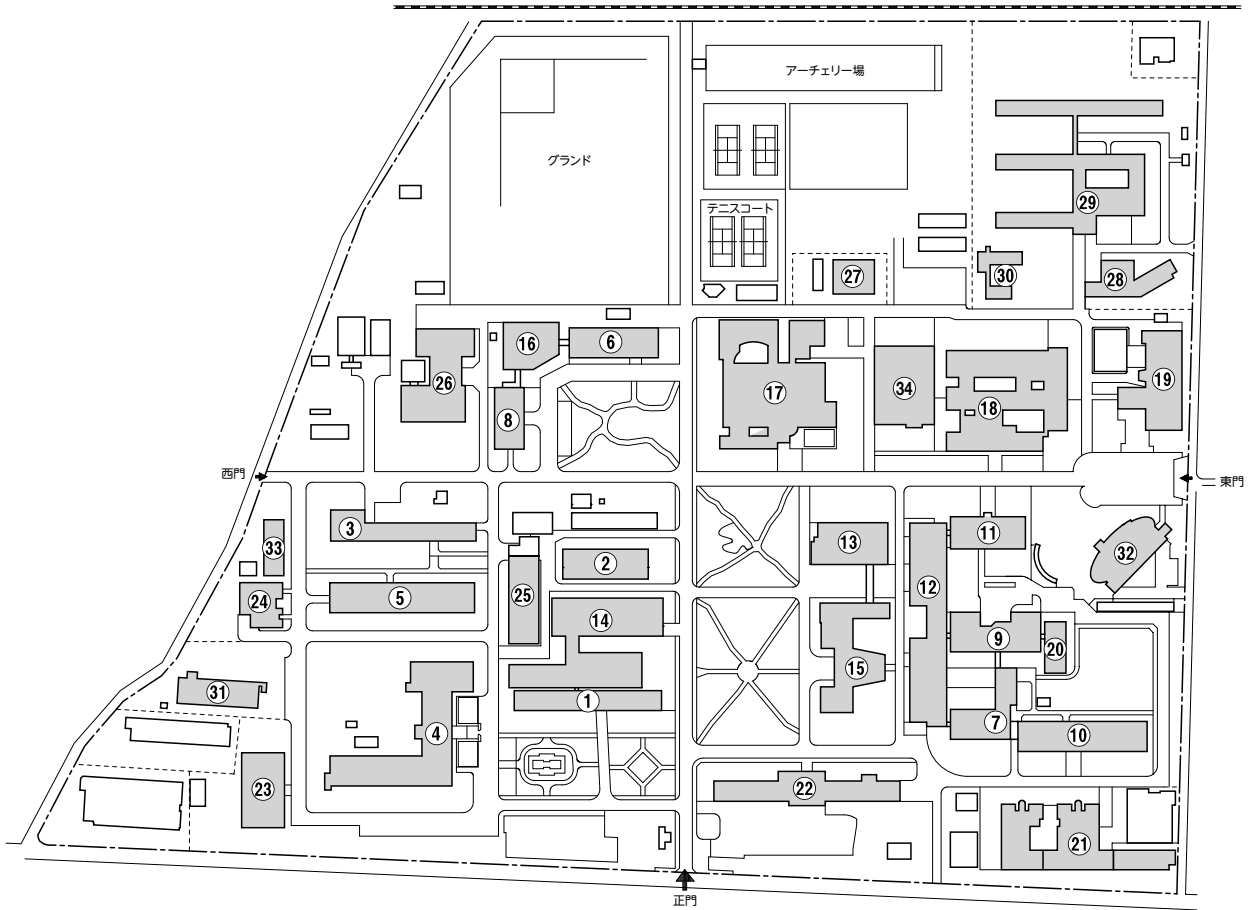
■ 3階



C-2 小金井キャンパス配置図

建物配置図

■ 小金井地区
(小金井市中町)



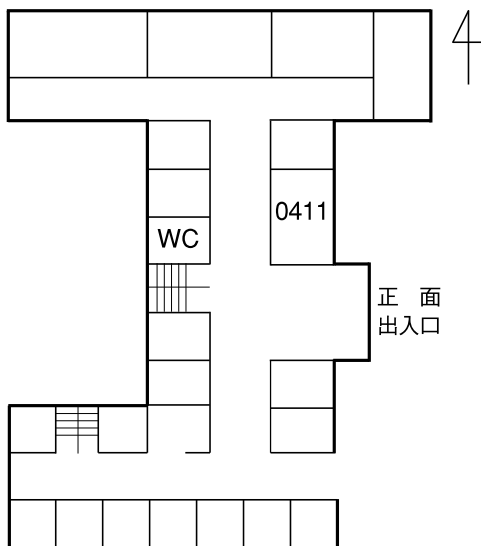
① 1号館	⑱ BASE 本館
② 2号館	⑲ 工学部総合会館
③ 3号館	⑳ CAD/CAM 実習棟
④ 4号館	㉑ 先端産学連携研究推進センター
⑤ 5号館 (機器分析施設)	㉒ 科学博物館
⑥ 6号館	㉓ 先端科学実験棟
⑦ 7号館	㉔ 環境管理施設
⑧ 8号館 (総合情報メディアセンター)	㉕ ものづくり創造工学センター
⑨ 9号館	㉖ 小金井体育館
⑩ 10号館	㉗ 工学部RI 研究施設
⑪ 11号館	㉘ 小金井国際交流会館
⑫ 12号館	㉙ 榊寮 (男子寮)
⑬ 13号館	㉚ 桜寮 (女子寮)
⑭ 新1号館	㉛ 小金井第2 宿舎 (職員宿舎)
⑮ 工学部講義棟	㉜ 140周年記念会館 (エリプス)
⑯ 14号館	㉝ 次世代キャパシタ研究センター
⑰ 小金井図書館	㉞ 管理棟 (愛称: CUBE) 保健管理センター

小金井キャンパス講義室

4号館	1階	L0411	12号館	1階	L1211～L1217
6号館	2階	製図室	13号館	2階	L1321～L1322
	3階	L0631		3階	L1331～L1332
7号館	1階	L0711	講義棟	1階	L0011～L0017
	2階	PC教室(2K)		2階	L0021～L0026
	3階	PC教室(3K)		3階	L0031～L0035
8号館	1階	L0811、eラーニング受講室	BASE	1階	講義室1～3
	2階	L0821	管理棟	1階	教務第一係、教務第二係
	3階	L0831			学生生活係、入学試験係
11号館	1階	L1111～L1114			保健管理センター
	5階	L1151～L1153		2階	非常勤講師室

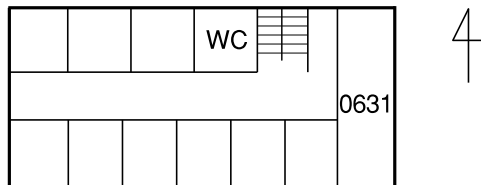
【4号館】

1階

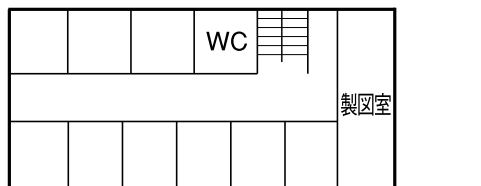


【6号館】

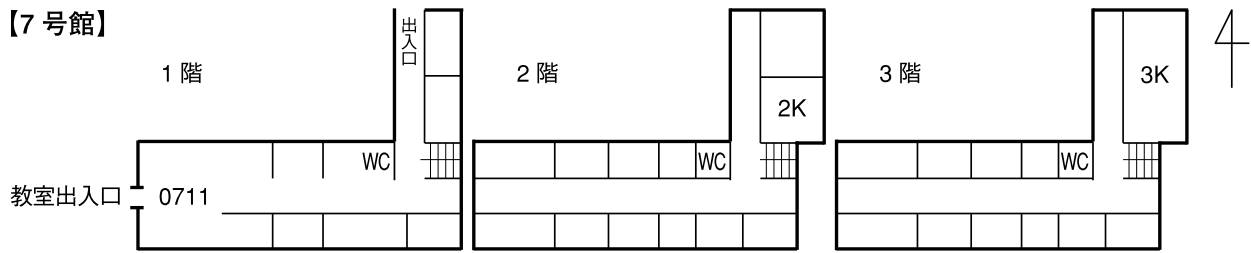
3階



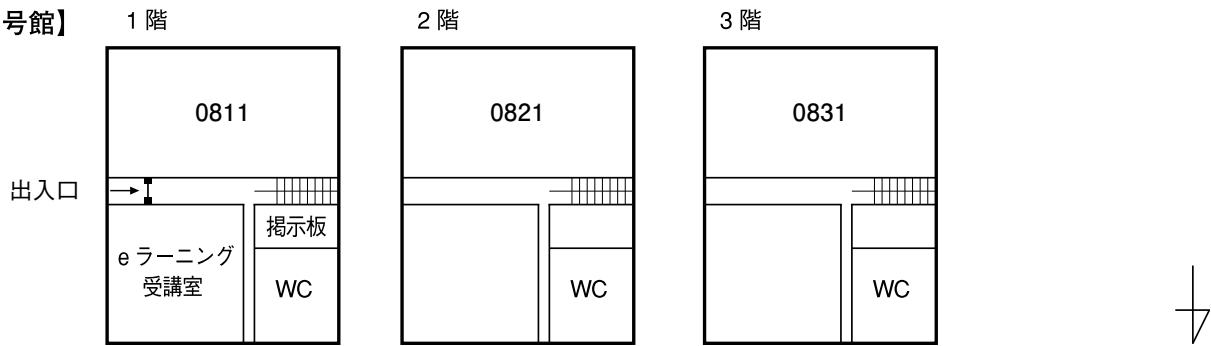
2階



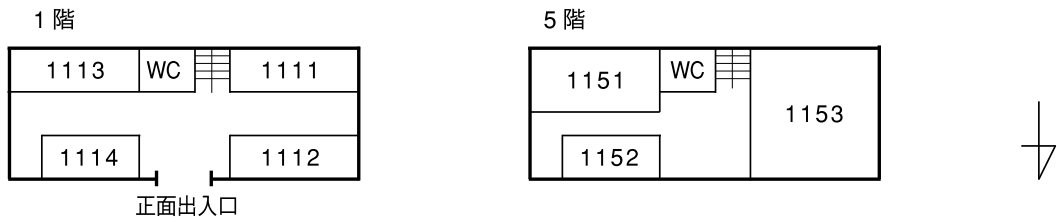
【7号館】



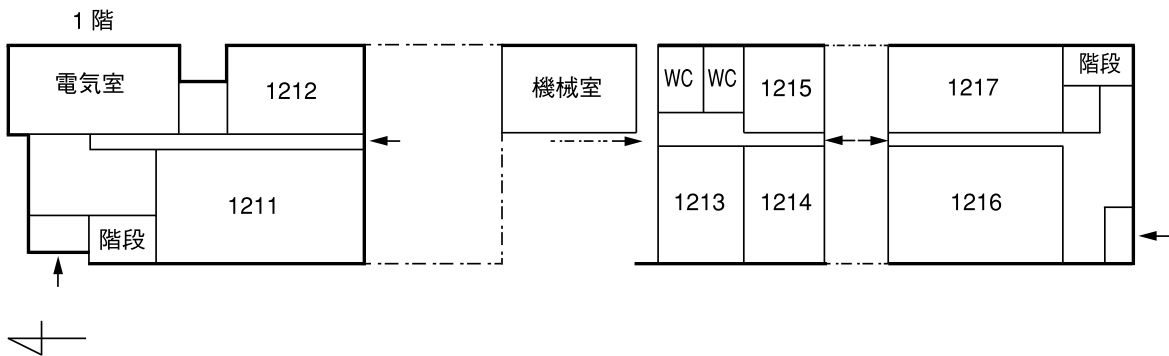
【8号館】



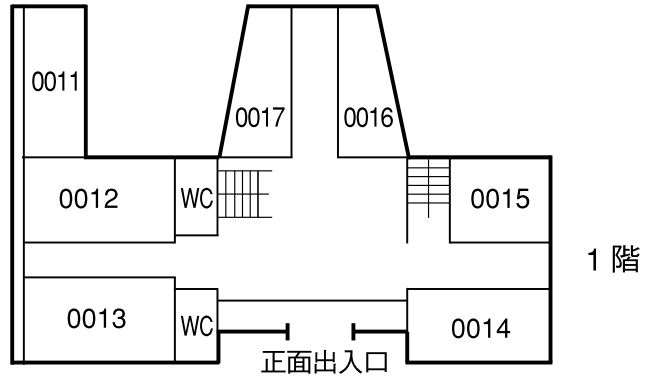
【11号館】



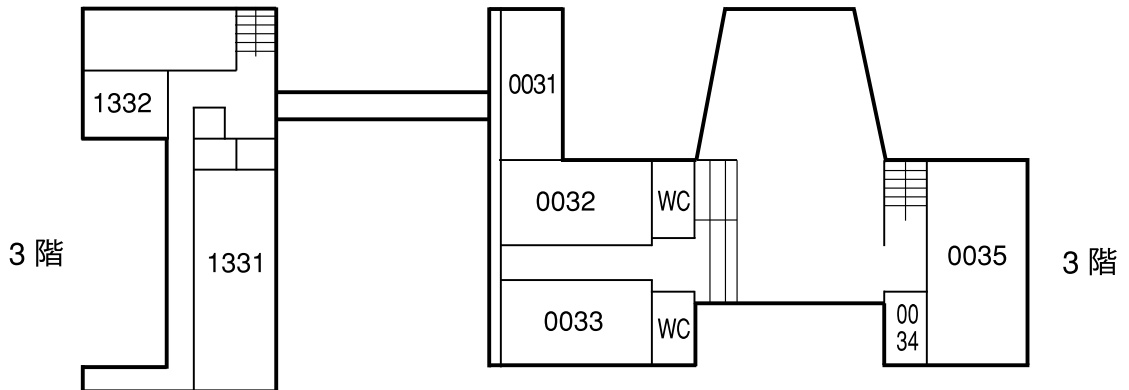
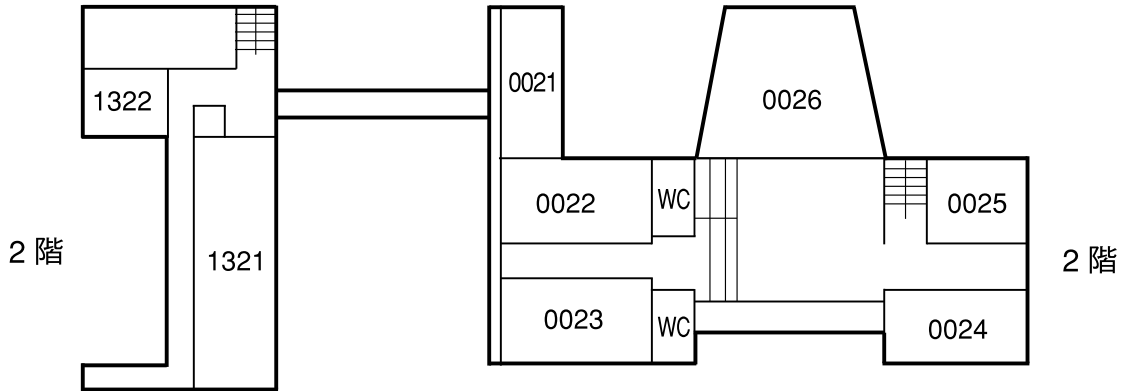
【12号館】



【講義棟】



【13号館】

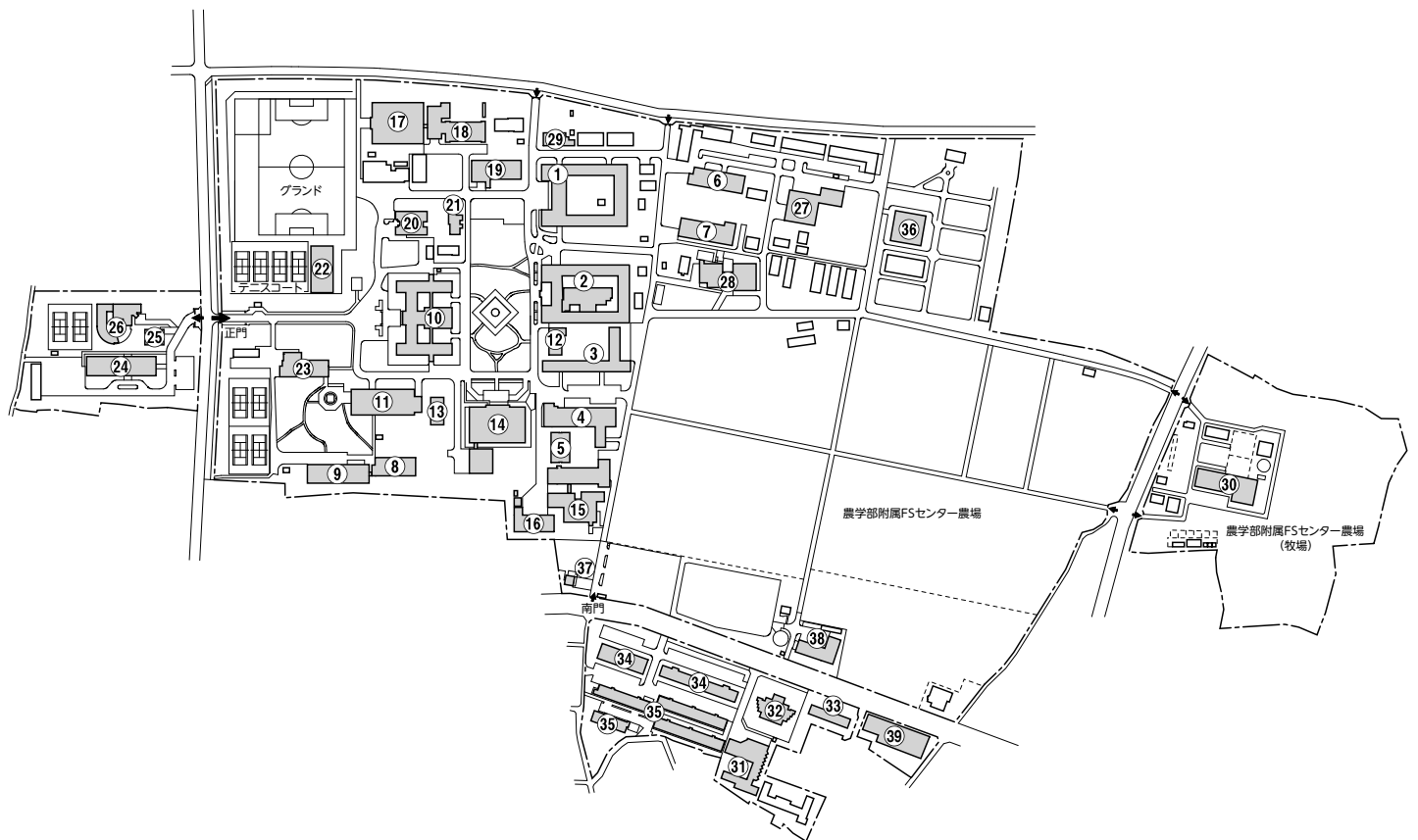


C-3 府中キャンパス配置図

建物配置図

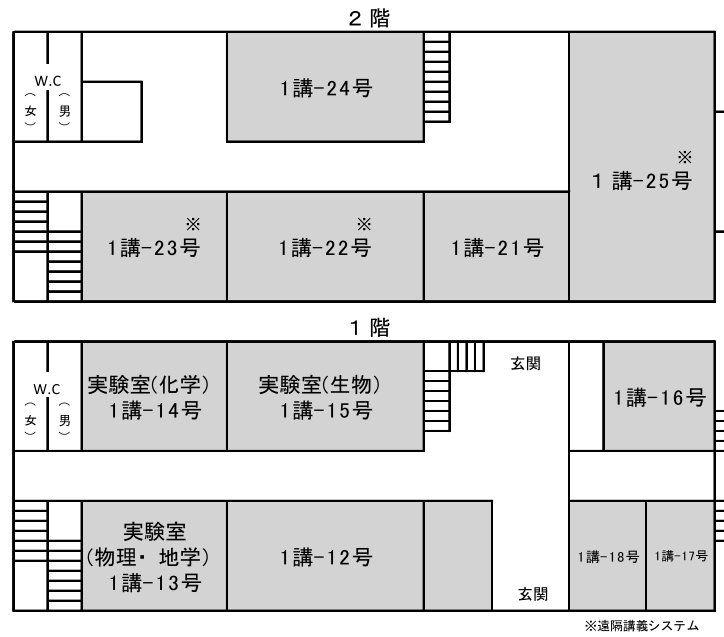
■ 府中地区

(府中市晴見町・幸町)

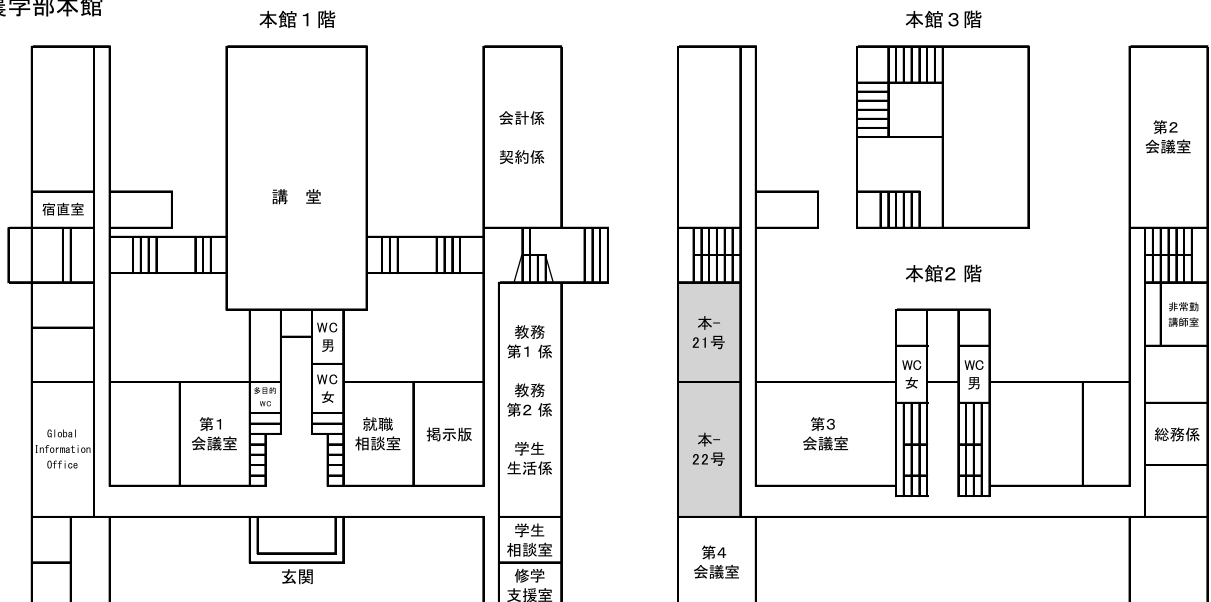


① 1号館	⑳ 大学院連合農学研究科 管理研究棟	㉿ 農工夢市場
② 2号館・新2号館	㉑ 共同先進健康科学専攻棟	㊿ 厩舎
③ 3号館	㉒ 運動場附属施設（ゴルフ練習場）	㊾ 檜寮（男子寮・女子寮）
④ 4号館	㉓ 本部（学務部）・グローバル教育院	
⑤ 新4号館	㉔ 本部管理棟	
⑥ 5号館	㉕ 保健管理センター	
⑦ 6号館	㉖ 武蔵野荘・50周年記念ホール	
⑧ 7号館	㉗ 広域都市圏フィールドサイエンス 教育研究センター	
⑨ 8号館	㉘ 遺伝子実験施設	
⑩ 農学部本館（科学博物館分館）	㉙ 農学部RI実験研究室	
⑪ 農学部第1講義棟	㉚ 乳牛舎	
⑫ 農学部第2講義棟	㉛ 府中国際交流会館	
⑬ 語学演習棟	㉜ 楓寮（女子寮）	
⑭ 府中図書館	㉝ 府中第2宿舎（職員宿舎）	
⑮ 動物医療センター	㉞ 府中幸町宿舎（職員宿舎）	
⑯ 硬蛋白質利用研究施設	㉟ 府中第4宿舎（職員宿舎）	
㉀ 府中体育館	㊿ 先進植物工場研究施設	
㉁ 総合屋内運動場		
㉂ 福利厚生センター		

農学部第1講義棟

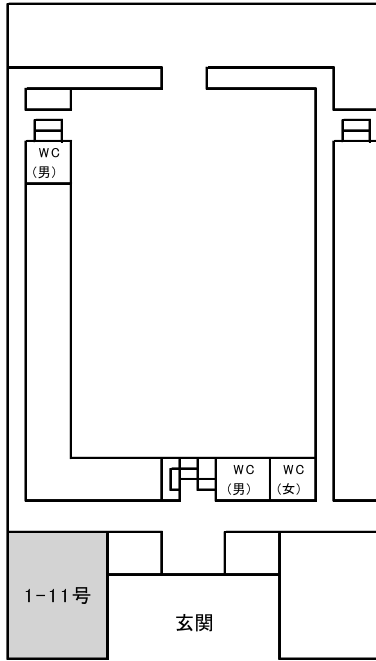


農学部本館



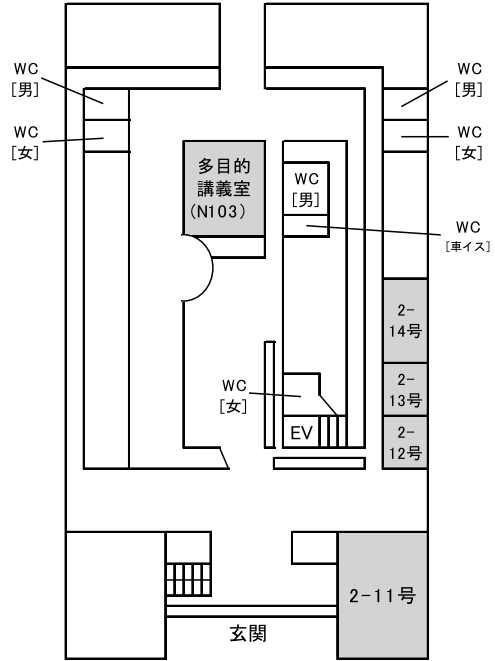
1号館

1号館1階

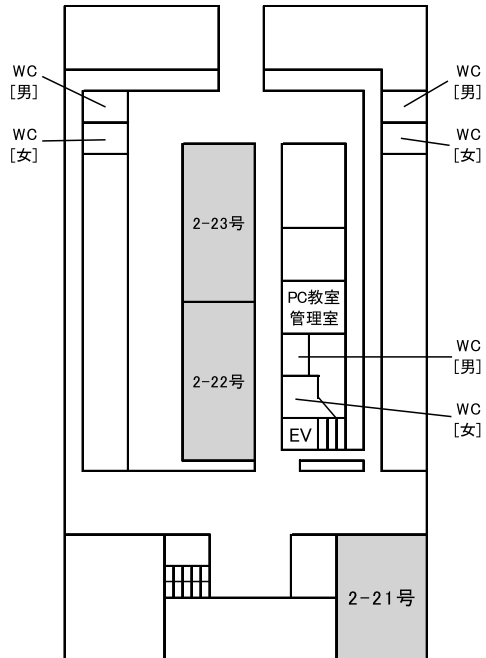


2号館

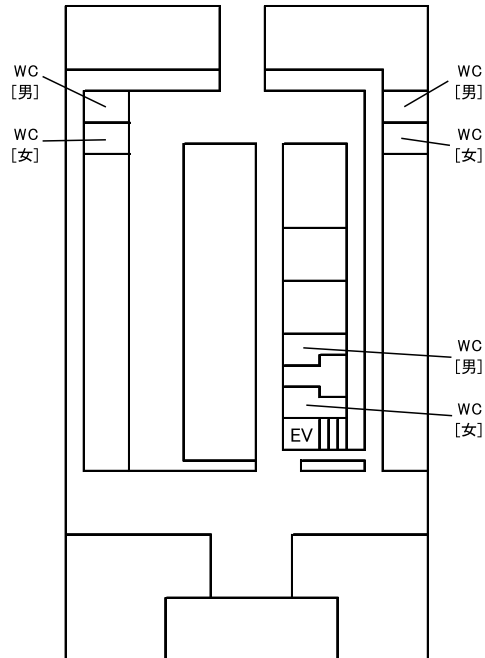
2号館1階



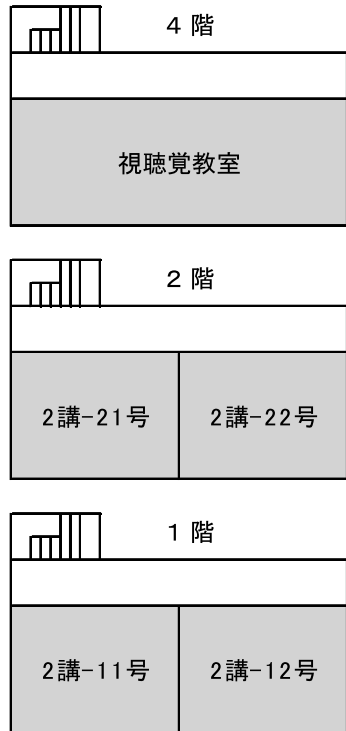
2号館2階



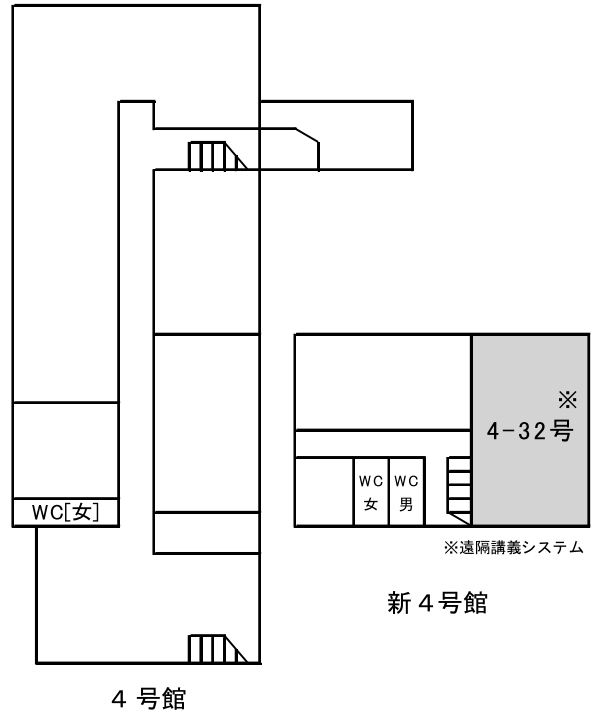
2号館3階



農学部第2講義棟



4号館、新4号館



5号館1F

